若者の労働問題の解決策

―ワーキングプア問題、生活保護の活用―

１１ＦＦ２９２６鈴木優斗
１１ＦＦ５１９７南　翔太

目次

第１章　働きたくても働けない若者

第２章　フリーターについて

第３章　不利な立場に立たされた若者

第４章　若者を雇う側の人間への考え

第５章　ワーキングプについて

第６章　就労支援による解決策

第７章　生活保護の活用

　１節　メディアの生活保護報道
　２節　生活保護―本来の制度―
　３節　生活保護による救済案

８章　まとめ

労働の貧困に対する解決策

はじめに

今の日本では若者にとって働きにくい社会があると思う。自分の周りの友達にも中卒などの学歴の低い人は就職に就きにくいという現状を見てきているので、若者が労働するのにあたって日本はやりにくい国だと思う。そういった現状なので、職につけない若者がニートやフリーターになってしまっているのだと考える。このようなニートやフリーターとして生活している若者たちが、今の日本の労働という面でどのように苦労していてどんな問題があるのかを考察していきたいと思う。また、どのようにしたら労働に困っている若者をしっかりと労働させてあげられるかを考えて行きたいと思う。若者がニートやフリーターという社会的に弱い立場に立たされてしまうのは、若者が働きにくい社会が出来てしまっているのが原因だと思うのでそういったことにも問題意識をもって考えて行きたい。

その中で、若者の労働による貧困問題が、今の現状的にもよく見られる。そういった貧困に苦しむ若者に救済措置として、生活保護という制度がある。そのことについても触れていく必要があると考える。

生活保護受給者には様々な境遇のある人たちがいる。そんな生活保護に対する私たち世間のイメージは良くない。冷ややかなものといっていい。それは実際の現状を知らずただ、TV や雑誌から出ている情報を元に私たちは、無意識にそのような意識をすり込まれているのだ。

私は、生活保護を受給している人は、社会から投打された人たちだと、この生活保護をテーマにするまで、そう考えていた。だが実際調べていくと自分の無知さに呆れた。生活保護を受給している人には様々な境遇があり、人生の岐路に立たされている人やこの制度を利用して生きながらえている人、この制度を利用して何とか自分のやりたい仕事に就こうとしている人、シングルマザー、様々な人がこの制度を利用しているわけだ。その中で、あまり世間が生活保護に対してあまり興味を示していない頃、一つの報道が TV で報道された。人気お笑いコンビ、次長課長の河本さんの母が生活保護を受給していたという事だ。この報道がきっかけになり生活保護に対する制度そのものの批判が起きた。私は、実際の現場を知らない者が、いかにもその事実を知ったかのようにずけずけと発言する人が嫌いだ。だれしもがそうだろう。だが実際テレビで報道された内容はいかにもな内容で、更に生活保護に対する世間の印象は悪くなった。

私は、生活保護が良くないといった印象を変えたい。生活保護を受けている事に後ろめたい気持ちを持つ人が今より少なくなってほしい。それは、不正受給も同時に引き起こすかもしれない。だけど誰しもが幸せになってもらいたい。ギブ&テイクという言葉があるように、受給した分しっかりと社会へでて活躍できる社会。そういった制度になって欲しいと願っている。

第一章では、理由があって働けない若者の現状について触れている。第 2 章では、フリーターになってしまうことについての考察を説明する。第 3 章では、正社員として働けな

い若者の問題について触れている。第 4 章では、若者を雇う側の人間への考えを述べている。第 5 章は、最近増えているワーキングプアについて触れている。第 6 章では、就労するための解決策を考察している。第 7 章からは、生活保護について触れている。その中で第 1 節は生活保護を我々国民が知る上で、メディアがどれだけ、重要な役割を担っているかを述べる。第二節では、生活保護の本来の制度について理解を深め、第 3 節で生活保護を活用しての救済案を考察している。

1. 働きたくても働けない若者

国際規模で競争を迫られた企業は、高い生産性を発揮できる労働者だけを選別し、それ以外の単純労務は機械化するか、外国人労働者を使うか、海外へ外注する傾向が強まっている（宮本 2012：

34)。このように企業などによっては、高い能力をもった若者は働けたとしても、能力を持っていない若者は機械や外国人労働者というものに労働する枠を奪われてしまい結果的に、働きたくても働けないという若者が生まれてしまっている。企業側がこういった能力を持っている若者以外は、機械や外国人労働者を雇えばいいという考え方でやっているのがいけない一つの要因であると考える。

このような能力がなければ職に就くことができないため、能力のない一定の人々は労働市場から排除されてしまう。そこから排除されないために、高い教育・訓練を受けようとしても、大きな経済負担を強いられるため、経済力や文化資本がない家庭に育てば、それらを受けることができない。(宮本 2012-35)。このように、家庭の事情などでちゃんとした教育を受けられずに育ち、ちゃんとした能力がない若者は能力がないというだけで労働市場から排除されてしまうのが今の日本の社会のようだ。そういった労働市場から排除されてしまう若者たちがニートやフリーターというものになってしまうのだと考える。だから、ニートやフリーターの若者が今の日本に増えているのだと思う。働きたくても働けない若者が増えているから、ニートやフリーターが増えているという問題が生じているというように考えるのが妥当だろう。

だから、能力がないからすぐに労働市場から排除してしまうのではなく、少しでもニートやフリーターの層の若者たちが労働市場に入りやすい社会作りが必要なのだと思う。

2. フリーターについて

１で書いたように働きたくても働けない若者が増えているのが今の日本の現状である。それと同時に就職に困っているそういった若者たちが、正社員にならずにアルバイトやパートといったもので生計を立てている。いわゆるそういう若者こそがフリーターというものである。

フリーターは、日常の生活を重視する「生活者」である。働くのは好きである。いやなことはしたくないが、仕事の中身や雇用形態にはそれほどこだわっていない。働くことは生活維持の手段であり、大切なのは「お金」である（矢島 2001：134)。このように仕事そのものにはこだわらずに、お金のためだけにアルバイトやパートでやりくりしている若者も存在する。こういった若者は、おそらくやりがいがない仕事ならやらない方がいいという考え方で生活しているのだと考える。

自分の就きたい仕事が決まっていなくて、自分が本当に何がしたいのかまだ見つかっていない若者が増えているのだと思う。そういった若者が増えることによって必然的にフリーターというものが増えてきているのだと考える。

働く環境がないのではなくて、自分の働きたい環境がないので働かないという考えを持った若者が増えてきているのだと思う。働きたい職場がないというが若者のわがままといってしまってはそうかもしれないが、まず社会全体がフリーターの若者にたいして働きやすく社会に入りやすい雰囲気を作っていくことが大切だと思う。

3. 不利な立場に立たされた若者

「正社員」として働くことができるのは限られた人々だけである。フリーターは、「正規雇用からはみ出した」人々からなっている社会層（妻木 2005：25)。とあるように正社員として働くことが出来ずに社会からはみ出してしまった若者たちが、フリーターという社会的に不利な立場に立たされてしまっている。

フリーターというものに自ら望んでなるものもいれば、正社員になりたくてもなれずにやむを得ずフリーターになる人々もいる。自ら望んでフリーターになる人々は、自分たちが社会的に不利な立場になってしまっていると思わないかもしれないが、やむを得ずフリーターになってしまっている人々は社会的に不利な立場に立たされてしまっていると自覚してしまいかねないと思う。こういった職に就けずに、やむを得ずフリーターになってしまう人々には様々な問題が関わっていると考える。その問題について考えて行きたいと思う。

まず問題として、今の日本の中で就職というものには「学歴」というものが関係していると思う。この「学歴」というものにはもちろんその人個人の能力が関係してくるところがあるが、家族の経済面によっていける学校が限られてしまい満足な教育を受けられない若者たちもいると思う。家族の経済面という面で生活水準が低い家庭では、親が低学歴に大きく偏っているというデータがある。(妻木 2005-27)。このように生まれながらにして経済面などにより、社会的に不利な立場に立たされている若者たちが存在する。こういった若者が存在する時点で、学歴がないから就職できないという形が存在している日本の社会がおかしいと感じる。きっと学歴のない人でも働きたいと思っている人々はいるのだから、そういった人々をしっかりと働かせられる社会を作り上げていくべきだと考える。

4. 若者を雇う側の人間の考え

自分なりに考えてみて、若者が働きにくい環境を作っているのは若者自身というよりも若者を雇う側の人間の影響が大きいものと考える。

これは、若者を判断し職場に入れる人事の人が若者の事を、学歴を重視して若者一人一人の力や個性を見るわけでもなく、学歴が良いからという理由で雇うという形が雇う側の人間が若者一人一人の価値をしっかりと見ずに判断することが問題であると考える。

雇う側の人間が若者一人一人の力や個性をしっかりと判断しなければ、雇われる側の若者としても、自分の力や個性を見ずに学歴だけで決められるというのなら、仕事に対してやる気があったとしても学歴の事を気にしてしまって働くという事に対して意欲をなくしてしまうように感じる。

なので、雇う側の人間が若者の力や個性に対してしっかりと向き合う事の出来る力を身に着けてほしいと思う。

若者に対して学歴だけで判断するという考えをなくしていき、しっかりと若者と向き合っていくような企業や会社が出来て行けば若者にも希望が見えると思うし、若者が働きたいという意欲も生まれてくると思うので雇う側の人間の若者に対する対応や考え方を変えていく必要があると思う。

図１

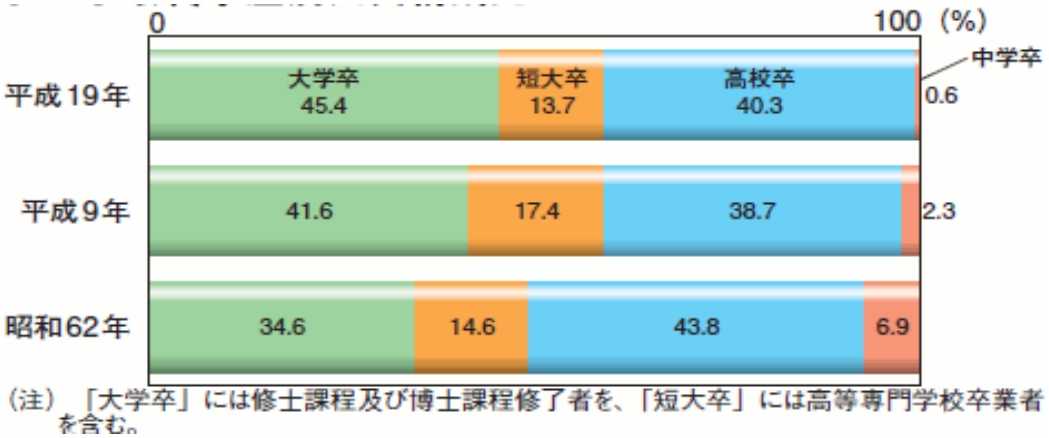


図１を見て分かるように、時代の流れと同時に大学卒のような高学歴の人を多く採用しているのが分かる。

図２

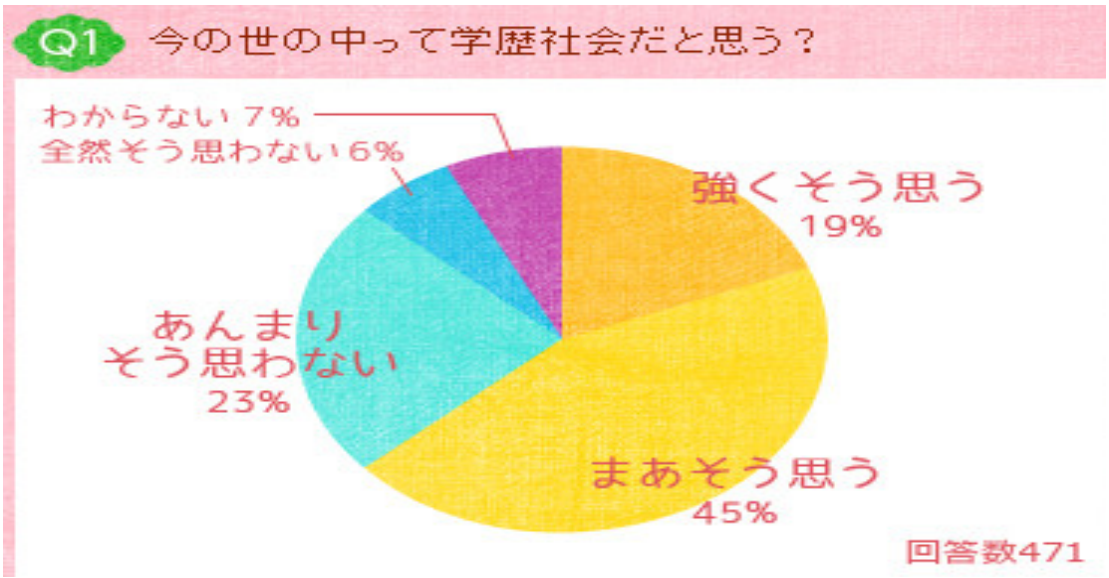


図２を見ても学歴＝就職というイメージを少しずつなくしていくことが、若者の働きやすい社会になっていくと思う。

学歴が低くて就職する場所が、給料の低い職場になってしまうとそれが結果的に学歴＝給料となり学歴が低い＝給料が低いということに繋がるという事も問題として考えて行く必要があると考える。

5. ワーキングプアについて

正社員と同じ時間働いても非正規雇用で働く人は、しっかり働いているのにも関わらず生活すらままならないそんな人々がいる。しっかりと働いているにも関わらず貧困になってしまうというのは社会的に大きな問題であると思う。

若者雇用問題が経済や社会の構造から生み出されたものであることについての認識が広がってきている（本田 2009-30）とあるようにこういったワーキングプアという労働者による貧困問題は、経済面はもちろんのこと社会そのものが起こしているのだ。

このようなワーキングプアのような社会問題があっては、学歴が低くて非正規雇用で働かざるおえない不利な状況に立たされている若者にとってはしっかり働いても貧困になってしまうので、ものすごく大変な生活を余儀なくされてしまうと思う。これでは学歴が低く不利な状況に立たされている若者は、まるで働くなと言っているようなもののように思えてしまう。ワーキングプアの問題がある以上働いても、働くだけ無駄になってしまう人々が出てきてしまうのでこのワーキングプアによる問題は解決していかなければならないと考える。

図 3

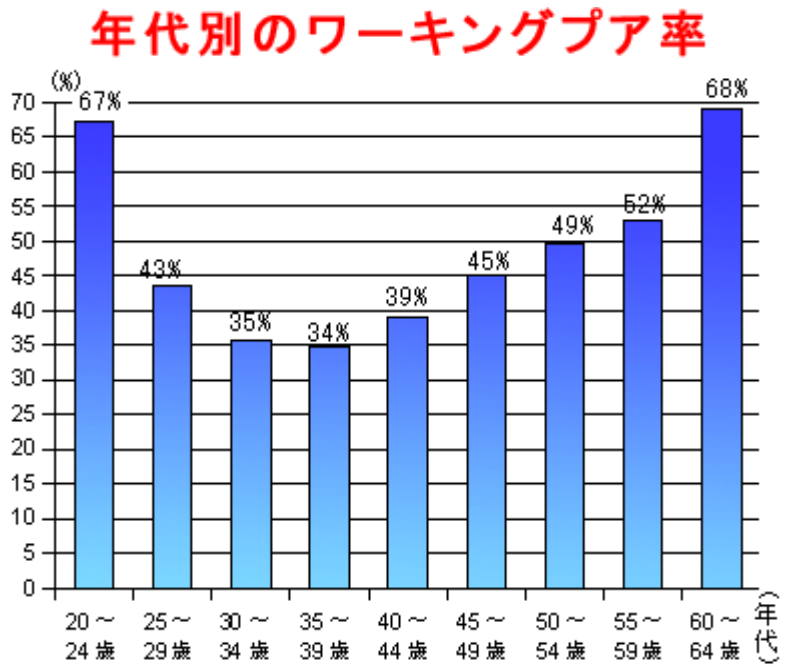


図３を見て分かるように、若者のワーキングプアの数が圧倒的に多いのが分かる。やはり若者が働いても給料が低くて貧困になりやすい状況になってしまっていることは否めない。この数字を見る限りでも 20 代のワーキングプアの割合と、30 代のワーキングプアの割合

とでは約２倍の数字であることを見ても、就職しだしてすぐの若者の給料が少ないということが分かる。

若者の就職の給料がこんな状況にあって尚且つ、学歴が低かったりする就職に不利な状況に立たされている若者にとっては､働くという事に関してものすごく厳しい状況である。

こんな状態では、若者の働く意欲がそぎ取られてしまっても仕方がないようにさえ思えて仕方がない。

6. 就労支援による解決策

学歴が低いことにより就職先の選択肢が少なくて自分のやりたい職業に就くことが出来なかったり、就職に就けたとしても給料が低くて貧困になってしまったりすることがあり、そういったことは一体どうやって解決していくのがいいのかということを考えて行きたいと思う。そういった時に単に学歴を上げるというのは難しく現実的ではないので、違う面からみて行こうと思う。

学歴を上げるという概念を捨てて、資格を習得したりその仕事に結びつく技術を磨いて就職を有利にすることが現実的であり、すごく効果的な方法であると考える。「結局若者雇用政策に王道なし、職業教育訓練によって技能を身につけ、採用されやすくする以外にうまいやり方はない」（濱口 2013：169）とあるように職業教育訓練を若者に施すことで、少しでも若者が就職に就きやすくなるようになると考える。こういった取り組みが少しでも会社などで増えて行けば、若者が働くときに苦しい状況に立たされることは減るのではないかと考える。

また、学校教育の中でもそういった職業教育訓練に関わることを少しでも取り入れていくことで更に就職への足掛かりができるように思う。

７．生活保護の活用

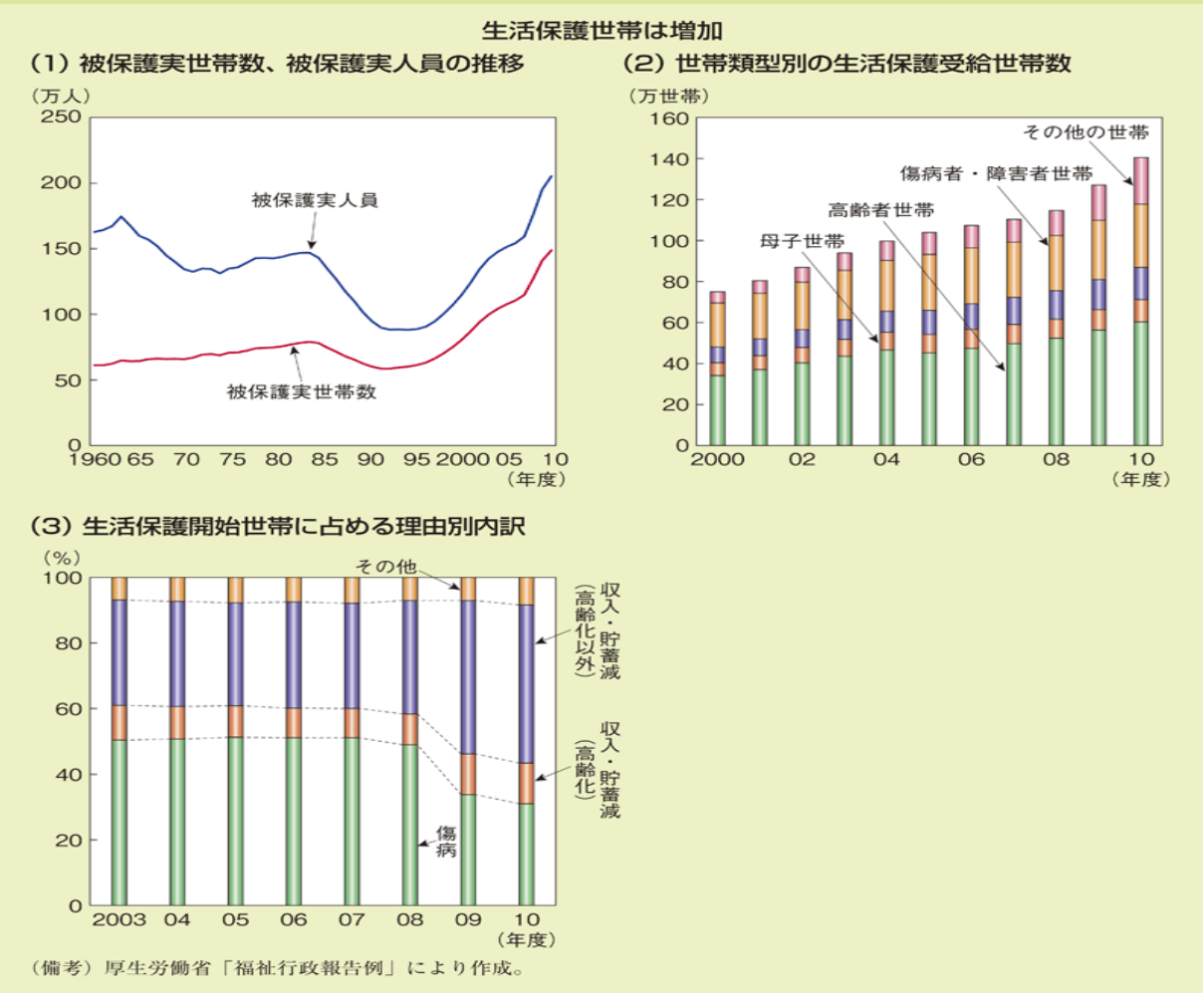
第１節　メディアの生活保護報道

今私たちが暮らしている世界は情報で溢れている。テレビ、ラジオ、ネット、新聞等、様々な手段を使って情報を獲得できる。このように様々な情報が行き交う中で、真実とは異なった情報が流れている事も確かだ。テレビから流れている情報を私たちは真実として受け入れているだろう。それは悪くないことだ。むしろ世の中の最新の情報が手に入る事は、素晴らしい。現代のツールの中で最も素晴らしいものだと思う。ただ、私たちは人間なのでその内容の捉えようは人それぞれだ。ただ正式に流れている情報なので私たちは信じてしまうだろう。テレビが「不正受給」といえばそれは「不正受給をした」という真実になってしまう。先も話したが、河本さんの場合でもニュースやワイドショーなどで何度も取り上げられた。このことによって、河本さんは悪だというイメージがついた。だから、メディアというものはいい面にも転ぶし、悪い面にも転ぶ。このメディアをうまくコントロールできたらそれは、最強だと私は思う。ここで私が言いたいのは、報道の流し方やネガティブな部分ばかりを報道することによって、生活保護に対する世間のイメージは悪くなるばかりだということだ。

生活保護を受給している人の境遇は様々で一人一人考え方も違う。もう働く事ができず生活保護を頼りに生きている人、働けるのに働かない人、大雑把だが今回は、働くという事をテーマに考えていきたい。

平成 20 年のリーマンショックと前後して「ワーキングプア」「派遣切り」といった労働者・失業者の困窮が社会問題となり、平成 21 年 3 月の厚生労働省内で「単に稼働能力があることをもって保護の要件を欠くものではない」という通達が出され、各自治体で稼働世代への給付が行われるようになった。つまり、働かなくても、申請をすれば受給してもらえるということ。申請基準が緩和した。　また生活困窮者の救済対策として生活保護という手段しかなかった事もこの受給率の増加に繋がっているのではないかと考える。

図４



現在、生活保護受給者の数は述べ２０５万人。そしてこの中から、高齢者世帯、母子世帯、障害者世帯、傷病者世帯、その他に分類される。そのなかで、稼働世帯「働く力はあるのに生活保護を受給する」層はその他に分類される。この層が問題となっているのは、増加率だ。この２年余りで、新たに生活保護を受給したのは４０万人。この内の４０％が稼働世代の受給者だ。増加率は、１，５倍になっている。稼働世代が受給する理由は主に、

「働くより生活保護を受けるほうが、実際働くより多くもらえる」「安定的に支給されるから心配がいらない」「今は働けない。ただいつか働けるようになったときに受給をやめる。それまでの間この制度を利用する。」など働くということに対して人は様々な価値観をもっているわけで、生活保護を受ける理由も人それぞれだ。私が考えるに、これから景気が好くなるか悪くなるかなんてだれにも分からないが、実際生活保護を利用するにあたって、人は生き行くことができる。最後のセーフティネットであると思う。ただ、実際真面目に働いて生活している人からしてみたら、働かず金を得ている人をクズなど下に見てしまう事は避けられないと感じる。私は、生活保護をテーマに考え様々な生活保護の情報を見てきたので、受給者に対する感情も最初のころとは大きく違っている。好い面悪い面を見てきたからこそ本当に生活保護という制度は必要なものに感じるし、受給者がダメ人間という考えは、してほしくない。

第２節　　生活保護―本来の制度―

本来のセーフティネットとは、制度の利用者が卑屈な思いをせずお互い様といえるものだと私は考える。生活保護の悪い面「不正受給」ばかり取り上げられるが良い面もたくさんある。悪い面ばかり取り上げられることによって受給者はますます劣等感に苛まれ肩身の狭い思いをしている。近所の人からは不正受給じゃないの？と露骨に言われる受給者もいる。また、「疑われているのではないかと人目がきになり、外出を控えている」「うつがひどくなり、布団を被って寝ている。」などの悲痛な声も聞こえており生活保護受給者の自殺率は、平均の２倍以上の高さで、それなのに偏見や無理解を拡大させる報道は茶の間に流されている。あるワイドショーでは、生活保護のエピソードを視聴者から集めて紹介していた。ある一人のシングルマザー、所持金がなくなって福祉事務所を訪れた際、職員から、本気で働く気があればどんな仕事も見つかるはずと、説教されたあげく申請書は渡されずじまい。「あんなに人間扱いされないなら、死んだほうがまし」と二度と行っていません。生活保護を受けようとする後ろめたさと、自尊心を傷つけられる。受給している間も「こんな屈辱的な生活はもうたくさん」と思わせ、状況が改善していないのに、辞退表を書かされ無理に打ち切られる。（水島　２０１２：７４・７５）

水際作戦も自治体も、マスコミ報道の影響が根深いからこそ、そのような対応になるのではないかと考える。生活保護は最後のセーフティネットと言っていい制度だが、いかにも生活保護を受ける行為が悪いという印象になってしまっては良くない。生活保護などの社会保障は、国民の生活を保障するだけでなく、その国のブランド力や治安を守る機能もあります。（和田　2012、１１４、１１５）

確かに生活保護を受給できず、餓死者や自殺者が出るとなれば、先進国日本というイメージは薄れて行ってしまうのではないかと考える。今までの日本は「豊かな国」「平和な国」だと世界各国から評価されてきました。しかし、街中のホームレスが増え、自殺者が増えたらどうか、「ああ、日本は貧しい国になったのだな」と見られてしまう。生活保護は「国の見栄代」でもある。国のブランドを守るためには生活保護こそまもるべきだ。

第３節　生活保護による救済案

テレビでは報道されない生活保護の問題は山ほどある。そこには、少子高齢化やワーキ

ングプアなど日本が抱えている問題がある。

そして、生活保護受給者にもさまざまな人が存在する。その多くは、高齢者や傷病者、シングルマザーだが２０代、３０代の若者もいる。稼働世代の受給者のうち「働く意欲や気力がない人。」彼らはとにかく働く事が嫌いな人たちです。これは、ゆとり教育の失敗が原因だと考えられる。「この根っからの怠け者」が年々増加しているとしたら、それはこれまでの教育政策の失敗を指摘しなければならない。ただ時代もずっと同じだとは限らず、必ず変化していく。昔の日本は、厳しく勉強させられるのが当たり前だった。ただ、ゆとり教育が始まってからは、それまでのように埋め込み式に勉強ばかりさせてはいけないということで、カリキュラムを減らしていった。昔は高校浪人、中学浪人が出るほど競争率が激しい世代だったが、ゆとり教育の世代の若者は言い方が悪いが努力もせず競争率が低い中で育ってきた。このことから、政府にも「ゆとり教育」を作ってしまった責任がある。だからそのような犠牲者を出さないためにも、改めて職業訓練をさせたり、心理カウンセラーをつけたりして再教育していかなければならない。

また、世間の目としては、稼働年齢層の生活保護受給者に対し、「働けるのに働かずブラブラしている。」「仕事を選びすぎるから就労できない」といった見方がされることは、少なくない。それらの背景には多く、「見た目ではわからない難病を抱えている」「学歴が中卒で、嫌われる種類の仕事を中心に求職しても、なかなか就労できない」といった問題がある。単に「働き口がない」といっても、一方では人手が足りない企業や産業がある。こうしたミスマッチを改善していく必要がある。第一の方法は、社会のニーズに合わせた形で生活保護受給者に職業訓練を受けさせることです。IT 業界やホームヘルパー２級の資格を取得させるなどといった、人材不足の職種に投入できる人材を育てるためのサポートをする。これは、ドイツやイギリスでも行っている「自立支援」の職業訓練だ。「職業訓練を行うと生活保護が受けられる。だがさぼると生活保護が削られる」といったシステムになっている。

まとめ

今回の若者と労働の問題についてまとめてみて、まず初めに思ったのが自分たちが大学を卒業して就職するときに、自分は果たして大丈夫なのだろうかという不安を覚えました。自分も職に就くことが出来ずにニートやフリーターになってしまうのではないかと思ってしまった。

おそらくここで取り上げてきた若者たちも同じ不安を抱えてきたのだと思う。だから職に就けないのならフリーターになればいいという考え方の若者たちが現われたのだと思う。

若者が働きにくい社会というものが出来てしまっているので、簡単にはこの問題は改善しないのかもしれません。なので、少しでも若者が社会に出たときに働きやすくなるように、学校での就職に対する授業や指導をしたりして若者の意識の中に社会や就職というものに対する免疫をイメージ付けしていくことが大切であると思う。

決してフリーターが悪いとは言わないが、やはり正社員として働いている人と非正規で働いている人との賃金の差があり、その差によってワーキングプアなどの貧困問題につながってしまっていると思うのでフリーター増加の問題はほったらかしにしてはいけないと思う。学歴などによって社会全体が働きにくくしていることに関しては、できれば学歴＝

就職というイメージを壊していかなければならないと考える。なので、若者を雇う側の企業などにも学歴というものに捉われない考え方を、若者を学歴だけでなく一人の人間としての価値を見出すという考え方を作り上げて行って欲しいと思う。立場の弱い若者たちの主張が社会に反映されていくことを強く願う。

こうやってまとめていくうちに、やはり若者が働きにくい社会なのだと痛感したので自分たちが社会出るときには気を付けたいと思った。

今回のレポートで私が最も言いたいことは、世の中は無理かもしれないが、生活保護を受けるのは、決して後ろめたいことではないということです。世間が思わなくてもいい、ただ受ける側が本当に必要としているのならば絶対利用してほしいのです。受給することを悪く考えないでほしい。若者が貧困に陥り、救済制度を利用できないでいるならそれは、死ねと言われているのと同じだ。上手く生活保護を受給し、人生を切り開いてほしい。

参考文献

宮本みちこ 2012 『若者が無縁化する』ちくま新書
矢島正見 2001 『変わる若者と職業世界』学文社
妻木進吾 2005 『排除される若者たち』解放出版社
濱口桂一郎 2013 『若者と労働』中公新書ラクレ
本田由紀 2009 『教育の職業的意義』ちくま新書
水島宏明 2012 『間違いだらけの生活保護バッシング Q&A でわかる ～生活保護の誤解と利用者の実像～』 明石書籍
和田秀樹 2012『テレビの金持ち目線』ベスト新書
本田由紀 2013『生活保護リアル』日本評論社
金平茂紀、永田浩三、水島宏明、五十嵐仁、2012『テレビはなぜおかしなったのか』高文研
田村宏 2005『これでわかる生活保護 Q&A』ミネルヴァ書房

図 1 白書等データベースシステム ssl.jinji.go.jp
図 2 ダイエットクラブ http://news.ameba.jp/20121107-263/
図 3 http://finalrich.com/guide/20/guide20-condition-working-poor.html
図 4 http://www5.cao.go.jp/j-j/wp/wp-je12/h05_hz030305.html